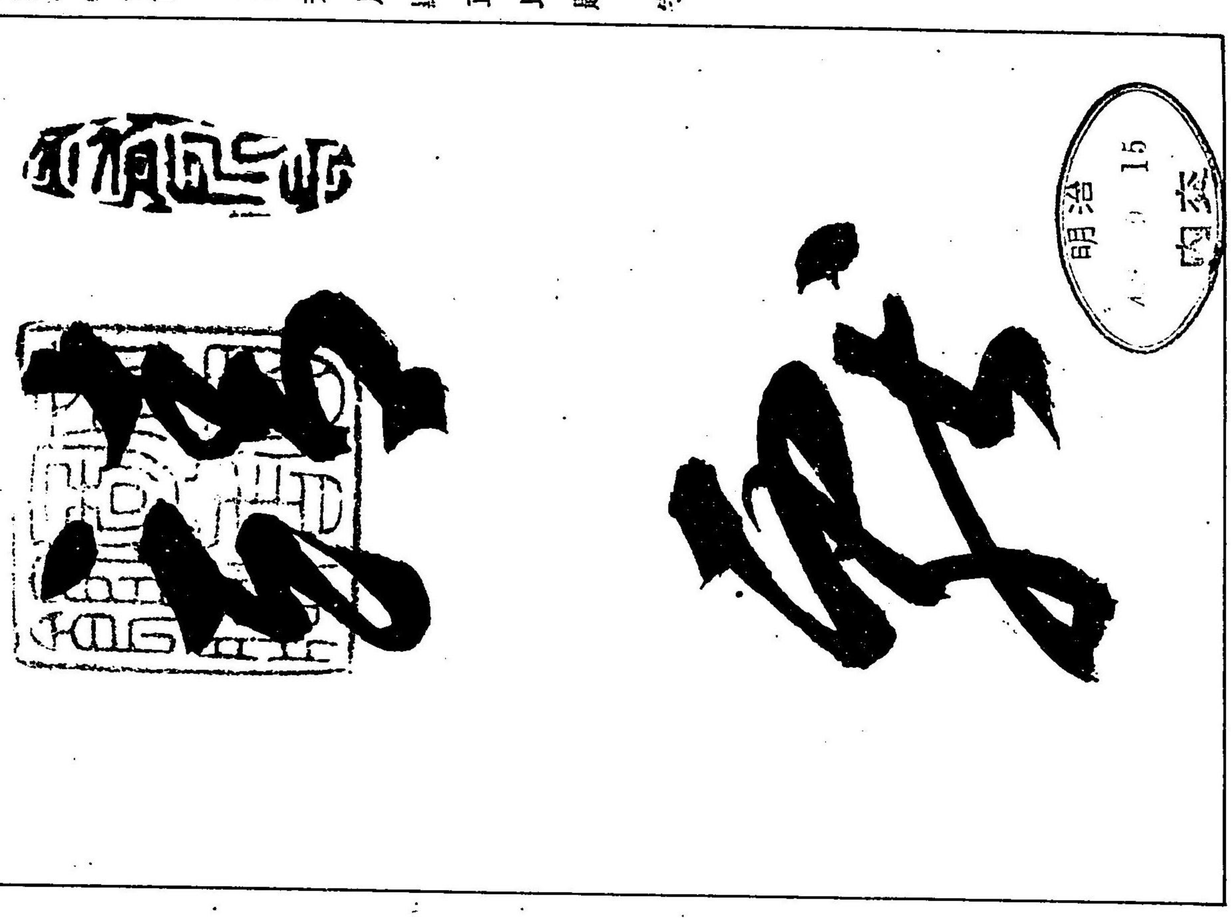
正二位勳一等伯爵（天皇題）芳川顯正氏題字



明治 15
内務

伯壽　芳川顯正

皇典講究所
國學院大學幹事　從五位　今井清彦氏詩並書

編述元寇因素志激流振
古語淳淳英靈地下應奪
更如道中未有主人
題金陵史案內記　今井清彦

今井氏ハ元官幣大社氣比神宮々司兼官幣中社金崎宮々司別格官幣社藤島神社宮司ヲ本職シ
萬世不滅ノ偉功ヲ奏シ且皇道發展ニ功績多キ錚々ノ士ナリ

327-102

# 緒言

一金崎宮創立沿革域内建築祭日等の事は社格宮號等を仰出されし其當時より引續き今に至迄編者當宮に奉仕し最初境内地の確定を始め土工建築其他諸般の計畫工費の整理事務の報告其後諸般の沿革等の事は職員と共に實地之に從事せり故に右に關する記事は誤なきを自明言し得れ共御祭神を始殉難諸將校の履歴及金崎城の戰況等の事に至ては當時攻圍軍にありし賊將の感狀を始島津文書。諏方部文書。佐賀文書。市川文書。茂木文書。氣比宮社傳記。太平記。參考太平記。續史愚抄。南山巡狩錄。後鑑。皇胤紹運錄。南朝巡狩錄。增鏡。神明鏡。櫻雲記。歷間記。梅松論。南方記傳。蛙抄。南狩遺文。大日本史。日本外史。關城書裏書。敦賀志稿等の諸書に據の外なし故に右の諸書を參酌し概要を記すと雖も素より淺學爲に猶誤多からんを恐る依て御祭神を始殉難諸將校の神靈に對恐懼に耐ず故に謹で茲に敬意を表し奉る讀者此意を

諒せ

一参拜者にて御祭神の御履歴創立由緒其他金崎城趾古戦場等の事を知んと欲する者多し故に此書は参拜人の乘にと其概要を記す

一書中に掲載せる神殿以下の寫眞畫は何も最近の眞影にて茲に掲載する所以は編者の筆の及ざる所を補ひ且讀者をして所謂百聞は一見にしかずの感あらしめんが爲なり

一當宮域内及金崎城趾の地は山紫水明眺望絶佳内地稀に見る景勝秀麗の地なる事は夙に識者の定評ありて實に其眞影は口以て言事能ず筆以て能記すべからず況て編者の拙筆を以てをや故に此書に記載せしは只其風景の一端を讀者に紹介するに過ずと云爾

明治四十二年八月

編者資雄識

# 金崎宮參拜案内記

用古戦場道しるべ

目錄


金崎宮祭神
金崎宮祭神御履歴
金崎宮創立由緒
同沿革
同建物
同境内
同祭日
御船遊神幸祭の起源
摩社祭神創立由緒
神樂

鷗ケ崎眺望所
鷗ケ崎海水浴
域内の櫻花
金崎城趾及古戰場
同懷古の詩歌
金崎城趾の碑
金崎城用水の古跡
月見殿舊跡
亘忠景泳渡の古跡
金崎城木戸櫓の舊跡
絹掛松の由來
金崎の巖屈
金崎城趾燒米の化石

# 金崎宮參拜案內記 附錄古戰場道しるべ

## 金崎宮祭神及御履歷

越前國敦賀港鎭座

一宮 氣比神社 金崎宮祭神

後醍醐天皇第一皇子 尊良親王

同第六皇子皇太子 恒良親王

尊良親王は後醍醐天皇の第十皇子にして御母は贈從三位藤原朝臣爲子前大納言爲世の女なり親王幼より資性聰慧容姿端麗にまし〳〵最も和歌に長じ給へり嘉曆元年正月八日十六歲にして御元服ありこの日中務卿に任じ二品に叙せられ元德二年正月一品に進み尋いで兵仗の宣下を蒙り給ふ

御父後醍醐天皇かねて北條氏の專恣を憎み之を討滅せむと企て給ひしがたま〳〵謀漏れ元弘元年八月東使上洛し主上を遠島に移し奉り併せて皇族諸卿の事に關係あるものを處分せひとす主上卽ち夜に乘じて都を出て笠置に幸し給ふ親王按察使公敏萬里小路藤房等の公卿と共に駕に隨ひ尋いで楠正成の赤阪の城に入り給ふ已にして笠置陷り主上執へられさせ給ふと聞き親王自ら出でゝ六波羅に赴き給ふ賊卽ち執へて佐々木時信の家に幽し奉る其の頃の御歌に

世のうさを空にも知るや神無月
ことわりすぎてふる時雨かな

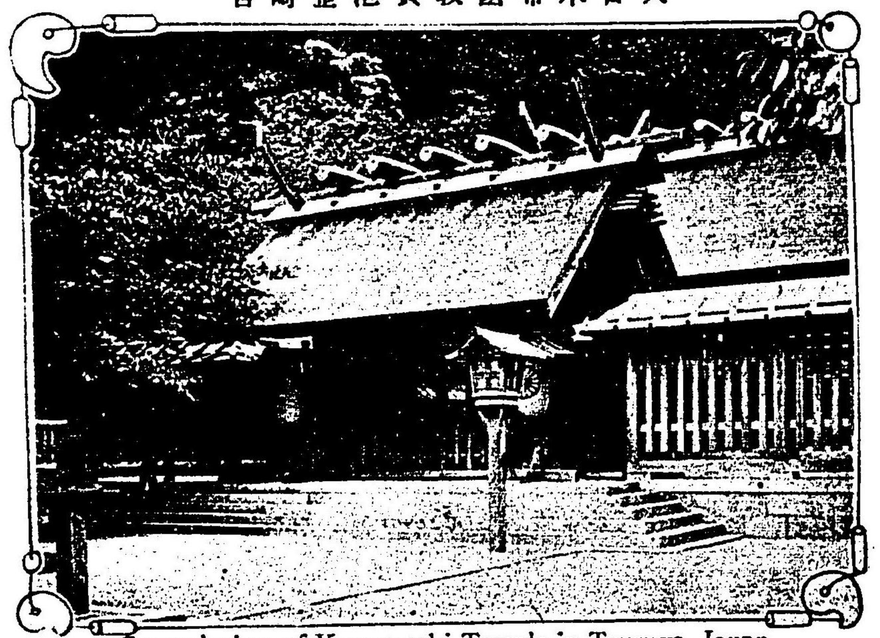
翌くれば元弘二年三月鎌倉よりの計らひとして親王を土佐の畑に流し奉る金枝玉葉憂き事知らぬ御身にて俄に邊土海濱のかそけきあたりに移され給ふ御いたはしさはいふも中々なり

聞きなるゝ契もつらし衣うつ
民のふせやに軒をならべて
春霞かすむ浪路はへたつとも
便しらせよ八重のしは風

これ其の頃の御詠なりいかに御心細くも思しけむわれ等臣民のかうにも涙なくては拜し難き御歌ならずや

さる程に天運空しからず翌三年五月には京鎌倉一時に亡びて主上隱岐より還幸ましまし〳〵ければ親王も郡の住

大日本帝國敦賀港金崎宮



General view of Kanagasaki Temple in Tsuruga, Japan.



居を立ち出でゝ再び九重の月見る御身とはならせ給ふ然るに中興の政僅に三年天下泰平を謳歌する暇もなく足利尊氏の謀反となり親王は上將軍を以て副將軍新田義貞と共に討伐の重任を負ひ東に下り矢矧手越に賊兵を破り道を分ちて箱根足柄に向はれしが京軍戰に習はず一旦竹の下に挫折しては忽反旗を翻す者すら出て止むを得ず兵をひきいて都に還らせ給ふこれ建武二年十二月の事なり

續いて尊氏京師を犯し一度は敗れて九州に走りしも延元々年五月再び大兵を擁して東上し義貞は退き正成は死し京師空しく賊軍の據る所となり主上は比叡山延暦寺に行幸し給ふこれより両軍の戰絶へ間なかりしが其年の十月尊氏詐りて降を乞ひ主上都に還幸あるに決せしかば親王は皇太子恒良親王と共に北國經略の任に當り洞院實世新田義貞弟義助等の公卿武臣を率ゐ雪爽ひまなき越路の憂旅を凌ぎつゝ同十三日敦賀に着き給へば氣比神宮の大宮司氣比彌三郎大夫氏治三百餘騎にて之を迎へ金崎城に入れ奉る

是に於て賊將足利高經若狭越前の兵を率ゐて來り圍みしが尊氏はなほ別に高師泰等の諸將を派し六萬餘騎の兵を以て急に攻めしむ城中籠る所幾何ならねど皆これ忠勇義烈の士身命を忘れて防戦につとめしかば賊兵如何ともする事能はず即長圍の計をなすかくの如くにして城圍を受くること五閏月外は一兵の來り援くる者なく内は日に〳〵糧食の空乏を告ぐるに至れり城中即相議して義貞義助實世等上下僅に七人夜密に城を出て杣山に赴き援兵を率ゐて來り救はしめひとす然れども杣山の兵は僅に五百餘人にて甲冑すら整はねば思ふに任せぬ事のみ多くて二十日あまりを過す中に金崎にては糧食盡き終ひに軍馬をも食ひ盡して今は全く食ふべきものもなく士卒は餓ゑ疲れて空しく死をまつ有様とはなれり賊は隙し知りけむ大軍一時に攻め立てければ見る〳〵二の城戸までも破られたり由良長濱の二人城將新田義顯の前に出で城中の兵ども數日の疲によつて今は矢一つをもはかゞ〳〵しくは仕るべからず今はかうよと見へて候ふ春宮をば小舟にて落し進らせ自



餘の人々は一所に集りて御自害あるべしとこそ存じ候へ其程は我等攻口に向ひて相支へ候べしといひもはてず引かへせば義顯げにもと打頷きやをら親王の御前にまゐり今ははやこれまでと覺え候ふわれらは武將の家に生れ弓箭の名を惜む身にて候へば自害して相果て候ふべし上様の御事はたとひ敵中に出でさせ給ふとも失ひまゐらする程の事はよもあらじ只このまゝにて御座あるべしと申しけるに親王はいつよりも御快げに打笑ませ給ひ主上都へ還幸なりし時我を以て元首の將とし汝を以て股肱の臣たらしむとのたまひき股肱なくしていかで元首を保つ事を得むわれも命を白刃の上に縮めて怨を黄泉の下に報いむと思ふなりそも〳〵自害はいかにするものぞと仰せられければ義顯涙を押へてかやうに仕る者にて候ふと刀を拔いて逆手に取り直し左の脇に突き立て右の脇の肋骨二三枚かけてかき破りその刀拔ひて親王の御前に置きうつぶしになりてぞ死したりける親王やがて其刀を取りて御覽ずるに柄口に血つきてすべりければ御衣の袖にて柄を卷き雪

の如くなる御膚を顯し御胸の邊に突き立て義顯が枕の上に伏させ給ふ時に御歳二十七延元二年三月六日の事なりけり左近衛中將藤原行房里見大炊助時義武田與一氣比彌三郎太夫氏治太田帥法眼等の人々御前に候ひけるがいざさらば宮の御供仕らむと一度に皆腹を切り城中八百餘人の兵士等も皆悉く從ひ奉れり氣比大宮司太郎齊晴は獨り春宮の御供して燕木浦まで落し進らせしがそれより直に取つて返し自ら首をはねて諸將の後を追ひたり河野備後守通治以下三十二人及び由良長濱安右六郎左衛門等先後敵を防ぎ或は力盡きて自害し或は敵に討たれて死せり又里見伊賀守時成瓜生保弟義鑑等の城を援けむとして懲れたるも又先に徂能通言弟通繩等が北下の軍に殿して近江の鹽津に斃れたるも時と所とをこそ異にすれ亦皆親王に殉し奉れるものといふべきなり

○恒良親王は後醍醐天皇の第六皇子にして御母は從三位藤原朝臣廉子なり元弘元年主上賊徒の爲に幽せられ給ひし時親王僅に八歳未だ幼少にまし〳〵しを以て之を藤原宣明の宅に置き奉る親王父帝の近きあたりにましますと聞こしめし景慕の情堪へがたく或夕暮中門に立ち思に沈ませ給ふ時しも遠寺の鐘聲幽にきこゑければ

つく〴〵と思ひくらして入相の
鐘をきくにも君ぞこひしき

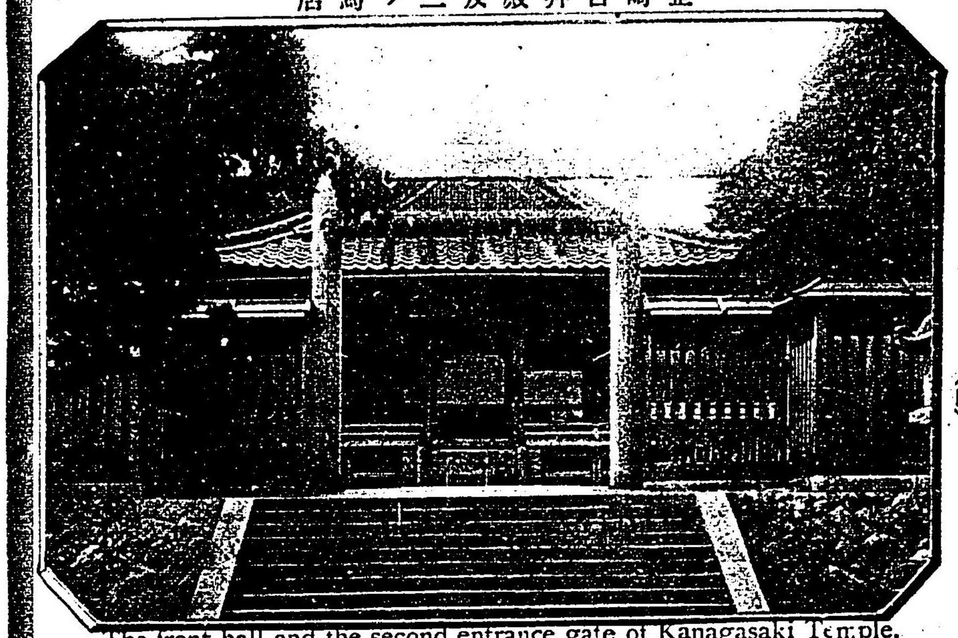
と一首の歌を遊ばされたり遠近傳へ聞き八歳の宮の御歌とて哀を催し涙を浮べぬものはなかりしとぞ

其後北條高時親王を但馬に移し守護太田守信の家に置き奉る元弘三年守信親王を奉じて兵を擧げ源忠顯に丹波篠村に會し共に六波羅を攻むその年五月天下一統に帰し翌建武元年正月二十三日御年十一にして立ちて皇太子となり延元々年冬勅命によりて御兄尊良親王と共に越前に下り金崎城に入らせ給ふ翌年城陷らむとするに臨み氣比大宮司太郎齊晴親王を小舟に奉じ燕木浦に落し進らせしが間もなく賊の爲に捕へられ給へり

足利高經諸將の首を撿し義貞義助二人の首なきを怪みて官軍の爲惡しかりなむと思しめし昨夕二人共自害せしを火葬にすといひ囁ぐを聞きたりと僞り仰せられしかば賊徒意を安んじて深くも探らずやがて親王を京師に護送し御弟成良親王と共に右大臣家定の花山院の第に幽し奉る

義貞義助は間に乘じて兵勢を蓄へ再び國中にうちていで直に敕城を取る尊氏直義親王の僞言を信じて機を弛べしを怒り之を弑し奉らむと欲し人をしていはしめて曰く幽居鬱陶病を生じ給はむを恐れ直義臣をして藥を奉らしむと一囊を留めて去る成良親王曰く藥を進むるは我を愛するなり豈人を愛してかく一室に憂悶せしむる事あらむやこれ恐らくは毒藥ならむと庭上に投せんとし給ふ恒良親王手づから之を取りて曰く尊氏直義は慘虐の性なりたとひ此の藥を飲まずとも到底死を免るゝ事能はざるべし一室に幽閉せられて空しく懊惱せむよりは早く死に就くに若かずと從容として藥を仰ぎ幾何もなくして薨じ給ふ御年僅に十五歳時に延元

金崎宮拜殿及二ノ鳥居



The front hall and the second entrance gate of Kanagasaki Temple.

三年四月十三日なりき思ふに尊良親王王種を以て武臣と進退を共にし慨然として自ら御身を鋒刃に托し給へる勇武壯烈何の辭かよく之を稱へ奉らむ而して其將卒の前後難に殉じたるもの皆恐く純忠の士一死報告以て人臣の範を示したる者なり恒良成良両親王が賊の毒手に斃れ給へるも自他の別こそあれこれ亦同じく國難に殉し給へるものといふべく殊に其の最後の御辭の如きは悲壯淋漓之を記し奉るだに輒熱涙の滂沱たるを覺もるなり嗚呼痛ましいかな

## ○金崎宮創立由緒

金崎宮に尊良親王の鎮座ありし起原は中昔延元の役親王金枝玉葉の尊きを以て此地に遠征し玉ひしは氣比神宮の大宮司氣比彌三郎太夫氏治已下義を唱へ河島維賴をして後醍醐天皇に其旨奏上せしに因る抑足利尊氏僞て和議を請ふに當り天皇叡山より京都へ還幸の際新田義貞の怒りを鎭め給はんとの思召を以て皇太子恒良親王に天子の御位を讓らせ給ひ天下の事大小とな

く義貞成敗して朕に換らす皇太子を取立參らすべしと



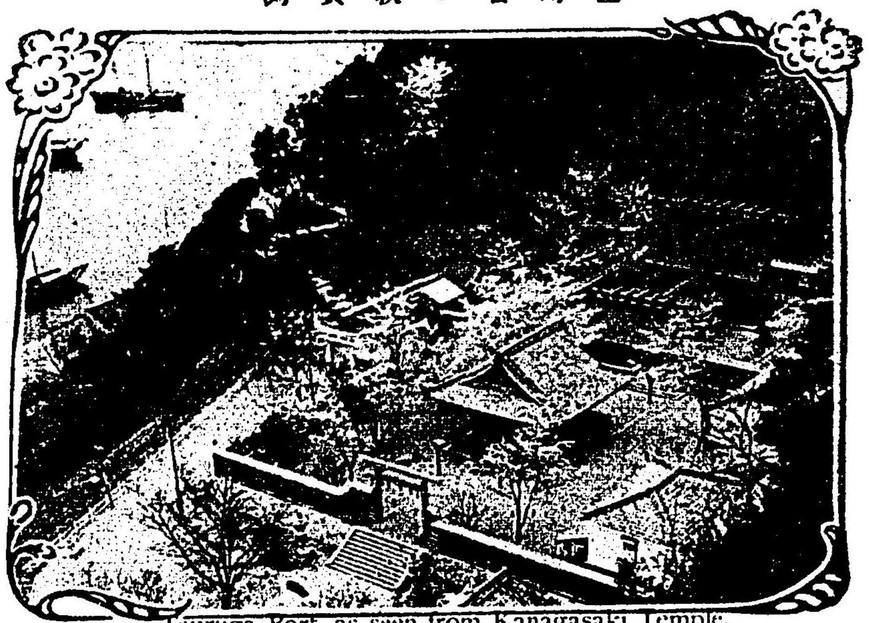
て俄かに受禪の儀を行はせ給ひて一の宮尊良親王新田義貞已下の諸將士七千餘騎を附し敦賀に至らしめ氣比氏治と共に北國を經略せしめ給ふ茲に於て東宮新田義貞の一族其他の公卿將卒を率ひ給ひて敦賀に行啓氣比氏治の居れる金崎城に據り半歲の久しさ鞠躬盡瘁皇威の恢復を計らせ給ひしも噫時なる哉不幸にして皇運回らず却て逆賊の厄する所となり食盡き城陷り恐くも尊良親王は御自裁あらせられ恒良親王は落城の際密に搦手より城を出給ひしが翌日賊徒の爲に捕て京都へ送れ給ひ新田義顯氣比氏治以下八百餘人戰死し永く怨を此土に留む今にして當時を回顧すれば悲憤の餘り滿腔の血沸き肉躍るを覺へ慘烈悲壯寔に言ふに忍びず特に親王の御自裁に臨み禦乎たるの御動作は實に和魂の精華にして當時を追懷し奉る者誰か血涙を濺ぎ親王の御勇武を感じ奉ると共に御運の開けざりしを慨嘆し悲憤扼腕せざる者あらんや爾來星霜を經る事五百三十有餘年に至り明治の聖代となり茲に當港の有志者親王の御靈魂を奉慰せんと欲して東奔西走盡力の結果遂ひに去る明治二十三年金五千圓を献納し此地に森殿の神殿を創建し尊良親王を祭祀し官社に列し給はん事を朝廷に申請せり然るに同年九月十二日畏くも宮號を金崎宮と宣下あらせられ社格を官幣中社に列せさせ給ひ内務省又神殿造營補助金五千圓を支出せられ又貴顯紳士共に此際擧て造營費を献納せられたり故に同年十二月に地鎭祭を擧行し次で御造營に着手す後又宮内内務の両省より金六千圓宛を賜ひて保存費に宛て給ふ又同二十五年十一月に至り恒良親王をも本宮に合せ祀るべき旨宣下ありかくて明治二十六年御造營工事全く竣工せしを以て同年五月五日特に宮内省より勅使御參向ありて御鎭座式及奉告祭共に嚴肅なる盛典を擧行し給ひ茲に始て天下後世両親王の王事に盡し給ひし御事業に報ひ併て御靈魂を奉慰する事を得たりと申奉るべきなり

## ○沿革

明治二十六年五月五日御鎭座後三ヶ年を隔てし同二十



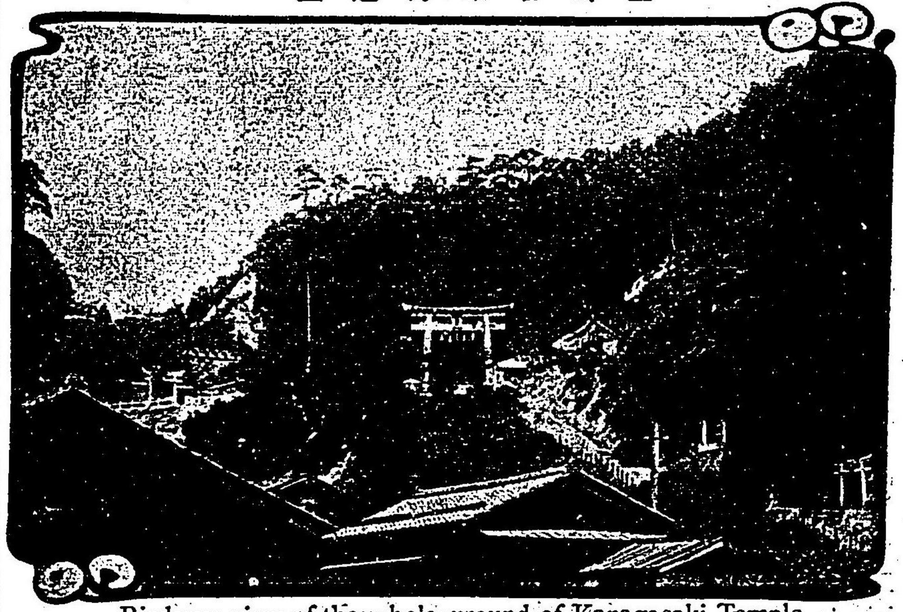
金崎宮ト敦賀灣



Tsuruga Port, as seen from Kanagasaki Temple.

八年の七月霖雨月餘に亘り當郡所々の山岳崩れ河川の堤防破壞し河水氾濫洪水出て市街の低地は床上七八尺に及び爲に人家橋梁鐵道線路等流失せし際當宮域内右方の山岳崩壞し神饌所手水舍社務所等顚倒の損害あり しも特に國費金二千餘圓の支出を得て復舊せし爾來當宮は無事平穩御安寧なりしに明治三十六年三月二十八日の夜敦賀町天滿區の民家火を失す折節東南風强く吹荒み瞬間に民家貳百五十餘戸燒失し其火飛んで當宮正殿及中門透塀等炎上す依て畏こかれ共御靈代を一時社務所の上段に奉迁し宮司已下の神職にて守護し奉りしも如何せん當宮は火焰の衝路に當り飛火宮域に落下する事甚しく且域内の山林各所炎上し其火焰に包圍せられ危險甚しくして域内には適當の御避難所なかりしより不得已御靈代を官幣大社氣比神宮の正殿に奉遷し御避難あらせられたり其際歩兵第十九聯隊長佐治大佐の命により一隊の將校兵士は御靈代御避難の前後を警衛し一隊は域内の防火に盡力せられし敬神の篤志と厚意とは永く忘るゝ事能はず而して御炎上の當日より

金崎宮域内遠望



Birdseye view of the whole ground of Kanagasaki Temple.



灰燼を收め宮域を清掃して假神殿に充てんが爲め攝社絹掛神社を修理し設備既に成るを以て同年四月二十三日御靈代を氣比神宮より當宮假神殿に奉遷し同年五月再建の事を政府に願請せしに越えて明治三十八年四月内務省は特に金壹萬九千六百四拾七圓を支出して造營せしむ（御炎上の正殿中門透塀等は現今正殿の背後山上にのうしを再建の際大鳥居右側の山岳を切り取り社務所前の凹地を充塡し拜殿社務所祭器庫手水舍攝社等を前面又は左右に移轉し從來の拜殿敷地跡に正殿を造營す）依て同年五月一日工を起し明治三十九年三月三十一日竣工す正殿以下の建物は從前明神造なりしを特に拂可を得て正殿中門渡り廊内玉垣中鳥居を神明造となす其構造森嚴にして意匠の新なる而已ならず銪金具の如きは藤原時代の模樣を參酌し最も精巧を極む而して造營土工裝飾雜費等に要せし金は貳萬七千圓にして内務省下附金を除きし餘は悉く一般篤志者の寄附に係る同年四月五日嚴然たる正遷宮式を擧げ六日七日盛大なる臨時大祭を執行し諸般の事滯なく遂行せられたり

## ○域内の風景

當宮の域内は歴史上著名なる金崎の古城趾にして翠綠滴るが如き中に巍然として聳ゆる神明式檜木造宮殿の金色は燦爛として海水に映じ之をめくらせる檜木造うの瑞垣は森林の間に隱顯し遠く之を望めば恰も一つの蜃氣樓の如し且文明の利器たる鉄道は宮域の山麓を迂回し敦賀港の市街及氣比の松原愛發野阪嶽其他の名所古跡は呼ば答へん計り近く一望の内に集り出入の船舶は織るが如く帆檣海岸に林立しながら一大銘畫を見るに等しき眺望他に多く其比を見ず殊に域内には櫻樹楓秩を多く植たれば櫻花滿開の春時は白雲宮殿を擁護するが如く又は白雪全山に降り積るが如く爛熳として咲き匂ふ風光は吉野嵐山にも勝う夏期は鬱蒼たる樹陰に涼み又淸々たる海水に浴して雲丹榮螺等を採取する者多く秋は皎々たる月光海上を照し金波は絶へず宮域の磯に寄せ咲き乱れたる秋の花は恰も錦を敷けるに

## 金崎宮境内ノ風景

Landscape of the enclosure of Kanagasaki Temp'e.

等しく冬期降雪の朝は江山一帯玉を綴れる景色なもいはれずかく種々の風景に富める宮域なるが故歴史上の古跡を訪ふ人又風光の明媚を賞する内外人の参拜する者頗る多く當宮の風景は夙に全國官國幣社中第一と稱せらる且や敦賀港は北陸に冠たる良港にて然も露領の烏港と連絡せる世界大道路の衝に當れるもの而して當宮は實に其港灣名區の第一位を占むされば當宮は將來敦賀港の發展と共に益々隆盛に赴き其神威の赫々たるは烏港より渡來せる外人をも驚嘆せしめ永く日本海の鎭護國家の守護神と仰がれ玉ふいとも畏き大神なりと謹んで茲に其概要を記し奉るになん

敦賀　那須宗賢

今日英魂可レ無レ恨
人群奉祀一溪間

吉野飛香薫二此山一
敦賀　山田正秋

櫻花栽得レ擁二新廟一

つき弓のをれし昔に引かへて
光をはなつ神のみづかき

熊本　吉水秀直



大御代の光もそひて金か崎
神の御稜威はかゝやきにけり

敦賀　石塚資雄

かへりみてわはけは高し金か崎
よにひゝきたる神のみいつを

松江　山下安詳

金か崎打よする浪の音よりも
たかきは神のみさをなりけり

舞鶴　今西弘重

金か崎黄金白銀ちりばめて
たてし宮ねそ久しかるへき

敦賀　愛宕藤月

花さくや仰く宮居は雲の上

## ○建物

一正殿　神明造檜皮葺
一渡り廊　檜皮葺
一中門　神明造檜皮葺
一内玉垣　檜木造
一拜殿　明神造
一二の鳥居　神明造
一外玉垣　檜木造
一一の鳥居　御影石明神造
一神饌所　檜木造瓦葺
一神饌用水井戸屋形
一祭器庫　檜木造瓦葺
一手水舍　檜木造瓦葺
一社務所　仝上
一同附屬建物
一浴室及仕丁部屋
一廊下
一雜具小屋
一両便所
一同上
一荒垣　檜木造
一制札塲　柿葺檜木造

一 献燈舍　柿葺
一 攝社神殿　明神造檜皮葺
一 拜所　瓦葺
一 玉垣　花崗石
一 鳥居　同上

## ○境内

東南の方は金崎隧道を境界とし西南隅は鷗ヶ崎を限りにて西北の方は字絹掛の内金崎城本丸の舊跡に經る金崎一帶の山岳にて金崎城趾の地一圓之なり

（但金崎隧道より絹掛に至る間麓は縣道及金崎驛構内愛宕神社金前寺小堀某の宅地を限りて嶺上中央の道路を界とし南面一帶の山林は當宮境内にて北面の方は泉村共有の山林なり）

最初御鎮座の當時は域内坪數三千坪を附せられ其後ち三ヶ度に二万四千四百五坪六合二夕を追附せらる故に現在の總坪數は二萬七千四百五坪六合二夕なり

## ○祭日

一月一日　新年祭
一月三日　元始祭
三月廿八日　御炎上陳謝祭
四月六日　御再建記念祭
四月十五日　春季記念祭落相當日
五月五日　御鎮座記念祭　午后氣比神宮へ神幸　甲冑武者數十名供奉
五月六日　例祭　午前奉幣使參向　官祭執行
五月七日　後祭
九月十二日　社格勅定記念祭
十月十九日　攝社御鎮座記念祭
十月廿日　御舟遊神幸祭
十一月廿三日　新嘗祭　奉幣使參向

猶此外に祈年祭毎月一日祭同六日小祭春秋皇靈祭及大祓式遥拜式其他の祭事多かれ共茲に省略す

## ○十月廿日御舟遊神幸祭の起原

十月廿日御舟遊神幸祭の起因は延元二年十月二十日新田義顯朝臣已下拾六騎朝敵の奇計に欺むかれ金崎城を取圍みし數萬の賊軍狼狽し遠く四方に逃れ走りて郡中一人の賊軍なきに至り城の圍み全く解けたるか故是只事にあらずとて城中の將士勝軍を祝し且尊良恒良両親王を慰め奉らんとて海上に舟を浮べ音樂を奏し歌謡舞曲を奏し終日祝盃を上げ軍中の鬱を散じ給ひしは恐こかれ共両親王を始め奉う新田義貞朝臣已下の將士に至る迄金崎籠城中最も愉快に思召れし日なるが故其御舟遊の古事を永遠に傳へ神慮を慰め奉らんとて御鎮座あらせられし明治二十六年十月二十日に始て御舟遊神幸祭を起せり其式の概要は當日午前中に御舟遊神幸奉告祭を嚴かに執行し午後一時神輿にて出御鹵簿及御神饌は鐵杖。旗貳旆。鹽水。大榊。神饌辛櫃。奏樂太鼓。奏樂人。舞女。鱈鉾。楯。弓矢。御太刀。前驅宜旦。甲冑武者。甲冑武者。本宮神輿。加輿。吳床。攝社神輿。加輿。吳床。奉供宮司。朱傘。主典。朱傘。已下各神職官民供奉員。鱈鉾雜具等にて當宮境内より縣道に出で天滿神社前通りを經て稅關脇の海濱より艤裝せる御舟に神輿を乗せ參らせ神職奏樂員舞女甲冑武者は御船に參向し其他の供奉員は供船に乘り敷艘の曳船勇間敷御船を金崎なる鷗ヶ崎及絹掛崎の方へ曳參らする中御船には蘇合香萬壽樂等の音樂を奏しつゝ神饌を献じ祝詞を奏上終て舞女二名彼の延元の昔白拍子島寺の袖が御酌に立ちし故事に倣ひて長柄

金崎宮御船遊

Boat-excursion festival of Kanagasaki Temple.

加柄を以て三度神酒を進め奉り次に歌謠笏拍子大和笛につれ舞女立て皇神○千代○末廣○等の舞を節面白く奏し終れば樂員は青海波其他の音樂數曲を奏しつゝ御船は金崎城趾の出崎なる絹掛の松のもとより輔浦灣に至り嶮崛奇石の風景を右方に取り轉じて再度本の海濱に御上陸前と同じ鹵簿にて午後四時頃當宮に還御あらせらる當日は此古式を拜せんとて老若群參す還御の後又祭事を行ひ夜に至る迄神樂數段を奏し奉るを例とす

太平記に云去程に百重千重に城を圍みたりつる敵も一時の謀に破られて近邊に今は敵といふ者一人もなかりければ是徒事にあらずとて城中の人々の悅び あへる事限りなし十月廿日の曙に江山雲晴れて漁舟一葉の月を載せ帷幕風捲きて貞松千株の花を敗けり此興都にて未御覽せられざる風流なれば逆旅の御心をも慰められんために浦々の船を點せられ龍頭鷁首に准へて雪中の景をぞ興せさせ給ひける春宮一宮は御琵琶洞院左衞門督實世卿は琴の役義貞は横笛義助は箏の笛維賴は打物にて蘇合香の三帖萬壽樂の破繁絃急管の聲一唱三嘆の調融々洩々として正始の音にかなひしかば天衆も爰に天降り龍神も納收するはぞなり簫韶九奏すれば鳳舞ひ魚跳る感あり誠に心なき鱗までも是を感ずることやありけん水中に魚跳り御舟の中へ飛入りける實世卿見給ひて昔周武王八百の諸侯を率ひ殷の紂を討たん爲に孟津を渡りし時白魚跳りて船に入りけり武王是を取りて天に祭る果して戰に勝つ事を得しかば殷の世を遂に亡して周八百の祚を保てり今の奇瑞古に同じ早く是を天に祭りて壽をなすべしと屠人是を調へて其胙を東宮に奉る東宮御盃を傾けさせ給ひける時島寺の袖といひける遊君御酌に立ちたりけるが拍子を打ちて翠帳紅閨万事の禮法雖レ異舟中波上一生の歡會是同と時の調子の眞中を三重にしぼり歌ひたりければ儲君儲王忝くも叡感の御心を傾けられ武將官軍も齊しく嗚咽の袖をぞぬらされけると見えたり

御船遊せさせ給ひし御事を思ひ出奉りて



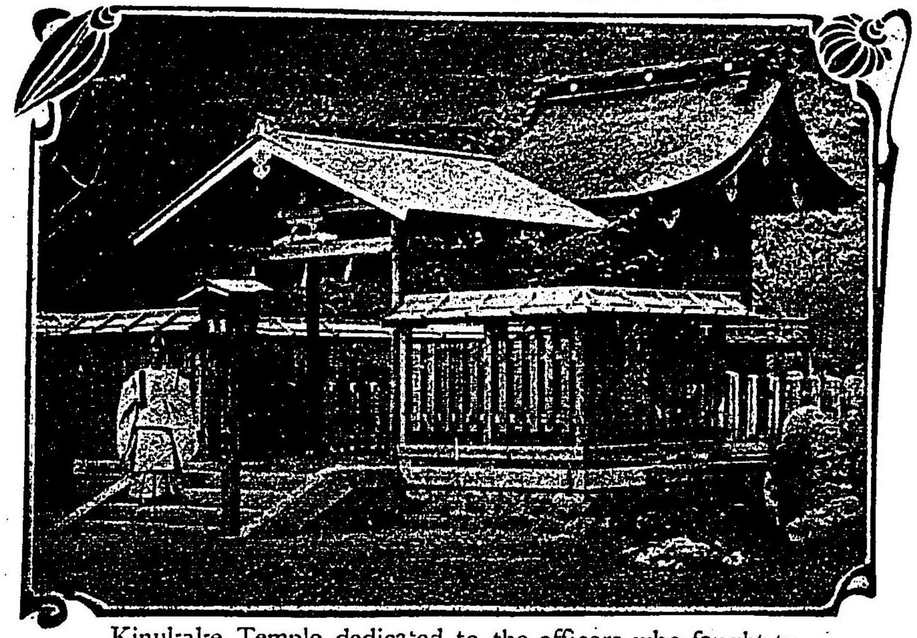
若狹小濱　西島信廉

糸竹のふりししらへを涙の音に
たくえてきくも悲しかりけり

## ○攝社絹掛神社祭神創立由緒

攝社絹掛神社の祭神は藤原行房朝臣新田義顯朝臣氣比氏治朝臣氣比齊晴朝臣里見時成朝臣瓜生保朝臣以下殉難の將校にて同神社は明治二十七年一月御祭神の後裔にて現存せる有志者相計りて祖先及殉難諸將校の爲め一社を創立し金崎宮攝社に列せられん事を朝廷に請願せしに明治三十年四月社號を絹掛神社と稱し金崎宮攝社に祭祀せらるゝ旨仰せ出さる依て直に工を起し同年十月御遷營竣工し同月十九日御鎭座式及奉告祭を擧行せらる其後明治三十八年本宮御再建諸建物の位置變更の際現在の地に社殿を移し明治三十九年四月五日正遷宮式を行ひ六日七日本宮と共に臨時祝祭を擧行せられたり同神社の祭神は何れも忠勇義烈の御稜威勝れ甚も畏き神々にてぞおはしける其内殊に一際御功績の

金崎城殉難將校ヲ合祀セル絹掛神社



Kinukake Temple dedicated to the officers who fought to death in the battle of Kanagasaki (1337)

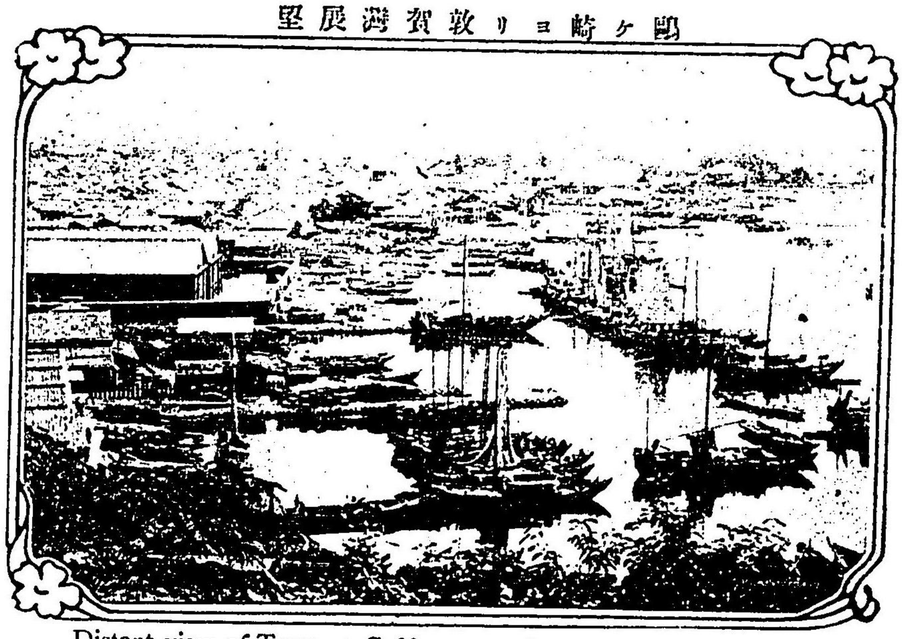
勝れ給へるは氏治朝臣にて當時天下擧て逆賊稔氏に隨ひ闇々たる賊氣天日を覆ふの際に當り其身は一社の神官ながら日本臣民の本分たる正義を唱へ金崎城に皇軍を迎へ終始怒れて後ち止むの精心を以て王事に盡し給ひし其効績や洵に偉大にして古來神官多しと雖も未だ曾て氏治朝臣の如く一族を擧て皇室に盡せし者なく又歴史上に日本武夫の精華を印し以て後世臣民の龜鑑となり猶又金崎宮の今日あるは畏かれ共全く氏治朝臣の金崎城に義兵を擧げ給ひしに起因する者にて其御稜威や實に高大にして誰か尊敬せざる者あらんや（當神社御祭神御事歴の概要は本宮御事歴の條と猶其他に大要を記せり故に茲に略して省きつ）

## ○神樂

神樂はかみあそびと稱する吾國固有の樂にして歌と舞とを以て主とし樂器は倭琴。和笛。笏拍子。の三種を用ひ（神樂に篠簫笛鈴子等を用ゆるは唐樂渡來後の事なり）歌に和して奏するものにて其濫觴は上古天の岩屋戸の前に於て天の鈿女命諸神と共に天照皇大神の御心を和げ奉らんとて庭燎を焚き槽疎かし胸乳あらはに足拍子おかしく歌ひ舞ひ給ひしに起因す故に神樂は凡て夜中に奏するを例とし庭燎を焚きて戌の刻の頃より庭上にて奏し鷄鳴の曉に至りて終るを本儀とす神樂歌は諸ひものゝ中にて最も高尚にして音聲の抑揚其節の穩雅極めて深遠なるが故容易に其妙所に達するを得ず其趣致は質朴の中に甚だ巧なる所ありて其妙味は口以て言べからず筆以て記す事能はざるは是全く日本臣民の優美を示すものにて古昔より傳へ來りし神樂の名稱は神樂舞。殊舞。田舞。小墾田舞。久米舞。吉志舞。倭舞。巫舞。等にて此外に伊勢。石清水。加茂。松尾。平野。稲荷。春日。日吉。貴船。今熊野。新宮。杵築大社。鹿島。香取。熱田。嚴島。の如き大社には古來其社相傳の神樂ありて優美殊勝なるもの也猶此外の諸社に傳來の神樂あれ共所謂里神樂と稱する類にて俗に近きもの多し當宮の神樂は貳十餘段ありて諸祭典其他臨時に奏し奉る



## ○鷗ヶ崎眺望所



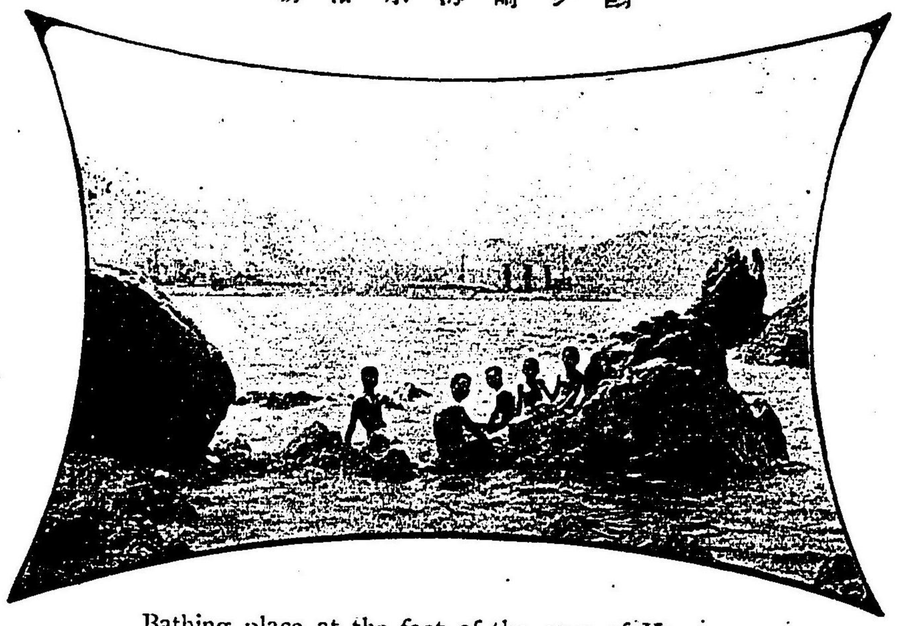

Distant view of Tsuruga Gulf, as seen from the cape of Kamome.

鷗ヶ崎は舞神社西南の方平坦の道路約一町許りの所にて海中に斗出せる岬なり同所は海面を抜く事約六十餘尺にして面積約三百餘坪の平面地には白砂を敷き均し周圍に櫻桃其他の樹木を植へ風致最もよし該地は當港灣の景致を襟帶の許に聚め眺望絶佳山紫水明風光明媚の勝地にて東端に一茶店あり客の到るを待てり又公設のベンチ休憩所は自由に觀光者の用もるに委せり故に此の秀麗の風景に對し展望に飽くを得べし又同所に到る道路には電燈の設けありて夜間の散策に便なるが故四時共に晝夜内外觀光者の絶間なく殊に夏期は海水浴又は納涼に赴く者多し故に一度此地に遊ぶ者は先づ山容水態の絶佳を感ずると共に古來如何に敦賀港が日本海の雄鎮たりしかを悟了する事を得べし

## ○鷗ヶ崎海水浴

鷗ヶ崎なる右方の細道を半町許り降れば一の幽邃清洒なる海濱に達す該所の海は比較的水淺く且水底は石灰石よりなれる小沙なるが故水底透明海水極めて清く浪

鷗ヶ崎海水浴場



Bathing place at the foot of the cape of Kamome.

靜にて海水に適す加之海岸に巨巖奇石多くして風致に富み又海岩には雲丹貝榮螺シタタミ其他の貝屬附着し大ひに趣味を添ふ故に夏期には貝類をあさり又海水浴をなし或は樹蔭に涼を納れ新鮮の空氣に快爽を覺へ歸去を忘るゝ者多し

## ○域内の櫻花

當宮域内の地質は櫻樹に適せる故にや餘所に比しては生育頗る良好にて數年を經ずして大樹となるもの多し故に櫻木を獻ずる者多く今は域内の櫻數千樹の多きに到り内地稀に見る櫻花の名所となれり而して櫻花には早咲。中咲。晩咲の三種あるが故他に比しては花期甚永く例年四月上旬より下旬に至る約三周間にて春山如笑好時季に至れば萬雷一時に花唇を開き天眞爛熳と咲匂ふ時春霞……立出て見れば恰も春雪宮域を埋むに等く又白雲宮殿を擁護するが如く森嚴犯すべからざる神殿は巍然として櫻花の上に聳へ嶺松の滴るが如き翠色は白妙の櫻花間に隱顯し其容姿はさながら色彩の配合宜きに叶ひ意匠勝れし花の畫卷物を見るに等しく山容水態の秀麗に向ひ一歩を進る毎に其形容改り艶麗なる花姿は天然の風致と共に增り行て管の根の永き春日の暮るも不知に花より花に浮れて飽期なく而して古來櫻花の名所は吉野嵐山と稱して吉野は花の名所なれば櫻花の多き事他に其比を見されど惜むらくは只櫻花の多きのみにて景色勝れし地にあらず又嵐山は麓なる大堰川の流れを隔てゝ櫻花を觀望する風景は都人士の謗とする所にて名所の名空しからずと雖も猶山海の風景に富る金崎の櫻花に劣る事は既に識者の定評あり抑金崎は眺望絶佳山紫水明の地なるが故花間に釣舟を詠め座して山海の景致をも自由に展望する事を得る地にて所謂錦上花を添るに等しき秀麗の風光は他に多く其比を見ず故に櫻花滿開の時期は文人雅客を始め其他内外の觀櫻者最も多く群集せり又夜間花下に焚く篝火の光は林間に輝く電燈と共に數千の櫻花に相映じ燦然たる其景色は又一段の詠めにて物云ふ花も立交はれる夜櫻を愛し春の夜の更行事も知ずに花



金ヶ崎宮ノ櫻花

Cherry blossom of the enclosure of Kanagasaki Temple.

下にうかるゝ好き者多し

海山のなかめのみかは金か崎
よにひゝきたる花のなところ
風雅男はきてもみよかし櫻咲く
金かみさきの春のけしきを

大中臣朝臣資雄

## ○金崎城趾及古戰場

金崎は天筒山の西北海中に斗出せる一の尾崎にて現今の金崎宮域内則ち是なり同地は往昔氣比神宮大宮司氣比彌三郎大夫氏治の居城にして地勢三方海に臨み山上には嶮岨なる一の通路ある而已にて所謂一夫之を守れば萬卒も進み難き要害無双の地にして山腹を始め城戸外堀共に人工を加へ峻嶮の地となし容易に登攀し難き城地となせし當時の形狀今猶存せり

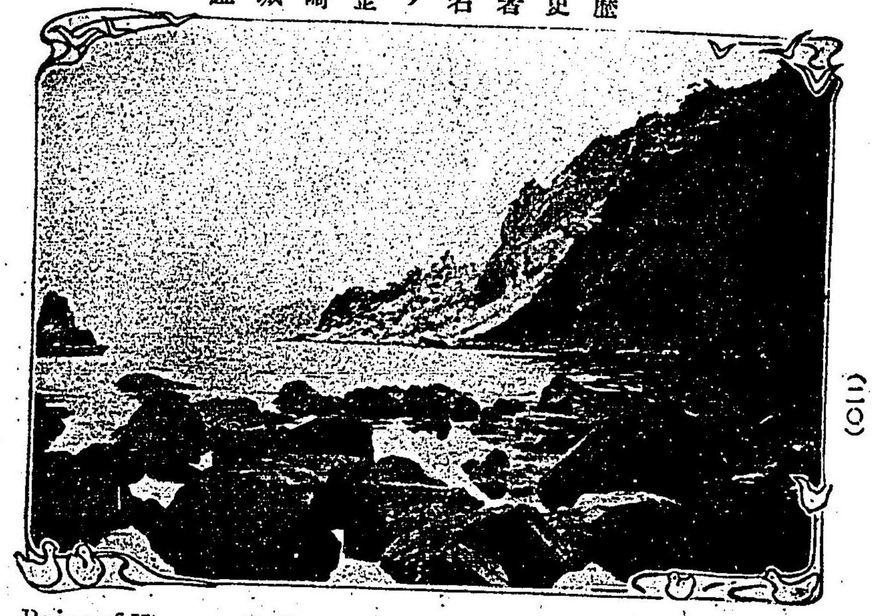
當時は現在の川東の地は未だ海中にてありしなり現今の川東陸地の出來せしは今より貳百七八十年前にて延元より三百餘年の後なり

延元の役氣比氏治本城に據り義を唱へ河島維頼をして後醍醐天皇に奏上せし結果皇太子恒良親王一の宮尊良親王新田義貞已下の將士本城に入り先づ北國を經略せんとす茲に於て氏治は杣山城將爪生保と（保は氏治の從弟なり）密に應援を約し以て逆賊を征討し皇威の挽回を計れり時に賊將足利尊氏令して足利高經高師泰等を遣し兵六萬餘を以て海陸より攻撃すされど城兵天險に據り奮戰して每戰賊數百を斃し未だ一回だに賊兵を城に近附す茲に於て賊等力戰以て拔くべからざるを知り遠圍して糧道を斷城兵を苦ひ

大平記に曰杣山より引き返す十六騎の勢に出拔かれ金崎寄手の四方に退散しぬるよし京都へ聞ければ將軍大ひに忍をなして嘘て大勢をゞ下されける當國の守護尾張守高經は北陸道の勢五千餘騎を率して燕木より向はる仁木伊賀守頼章は丹後美作の勢千餘騎を率して攝津より向はる今河駿河守は但馬若狹の勢七百餘騎を率して小濱より向はる荒河參河守は丹後の勢八百餘騎を率して四壇より向はる細川源藏人は四國の勢貳萬餘騎を率して東近江より向はる高越後守師泰は美濃尾張遠江の勢六千餘騎を率して荒血中山より向はる小笠原信濃守は信濃國の勢五千餘騎を率して新道より向はる佐々木鹽治判官高貞は出雲伯耆の勢三千餘騎を率して兵船五百餘艘に取り乘りて海上よりゞ向ひける其勢都合六萬餘騎山には役所を作り奥べ海には船筏を組みて城の四方を圍ぬる事隙透間もなかりけり彼城の有樣三方は海に依りて岸高く巖滑なり巽方に當れる山一つ城より少し高くして寄手城中を目の下に直下すといへども岸絶ゑ地低にして近づき寄りぬれば城郭一片の雲の上に峙ち遠くして射れば其矢萬仞の谷の底に落つされば如何なる巧を出して攻るとも切岸の邊までも近づくべき樣はなかりけれども小勢にてしかも新田の名將一族を聚して籠られたり寄手大勢にてしかも將軍の家來威を振ひて向はれたれば両家の爭只此城の勝負にあるべしと各機を張り心を專にして攻め戰人事片時もたゆまず矢に當りて疵を病み石に打れて骨を碎くもの每日千人貳千人に及べども逆茂木一本をだ



歷史著名ノ金崎城趾



Ruins of Kanagasaki Castle. celebrated in the history of Japan.

にも破られず是を見て小笠原信濃守究竟の兵八百人を勝うて東の山の麓より巽角の尾を直進にかつぎ連れてゞ揚げたりける城には此や破らるべき所なりけん城中の兵三百餘人二の關を開きて同く打ちて出たり両方相近になりければ矢を止めて打物になる防ぐ兵は此を引かば繼きて攻め入りぬと危みて一足も退かず戰ふ寄手はいふがひなく引きて敵御方に笑はれじと命を捨てゝぞ攻めたりける敵さすがに小勢なれば戰疲れて見ける處に例の栗生左衛門火威の鎧に龍頭の甲を夕日に躍し五尺三寸の太刀に樫の棒の八角に削りたるが長さ一丈貳三尺もあるらんと覺えたるを打ち振りて大勢の中へ走りかゝり片手打に二三十重打にぞ打たりける寄手の兵四五十人犬居にどうと打ち据ゑられ中天にづんと打擧げられ沙の上に倒れ伏す後陣の勢是を見てしどろになりて浪打際に群立所へ氣比大宮司太郎大學助矢嶋七郎赤松太田の帥法眼四人透間なく打ちて懸りける間叶はじとや思ひけん小笠原が八百餘人の兵一度にばつと引きて

援其効を奏せずして終ひに當郡樫曲に於て保時成義鑑已下戰死す

大平記に曰延元二年正月十一日雪晴れ風止みて天氣少しく長閑なりければ里見伊賀守を大將として義治五千餘人を金崎の後詰のために敦賀へ差し向けらる其勢皆吹雪の用意をして物具の上に簑笠を着踏組の上に樏を履みて山路八里が間の雪踏み分けて其日葉原まで寄せたりける高越後守もかねて用意したる事なれば敦賀津より二十餘町東に當りて究竟の用害のありける處へ今河駿河守を大將として二萬餘騎を差し向けて所々に搔楯かかせて今や寄するぞ待ちかけたり夜あけければ先づ一番に宇都宮紀清爲三百餘人押し寄せて坂中なる敵千餘人を遥の峯へまくり上げて嘸て二陣の敵にかからんとしけるが両方の峯なる大勢に射立てられ北なる峯へ引き退く二番に瓜生天野齋藤小野寺七百餘騎鋒を調へて上りけるに駿河守の堅めたる陣を三箇所追ひ破られはつと引きける所へ越後守が勢三千餘騎荒手に代りて相戰ふ所に



本の陣へぞ歸りける今河駿河守此日の合戰を見て推量するに此が如何樣破られぬべき所なればこそ城より此を先途と出ては戰ふらめ陸地より寄せばこそ足立惡しくて輙く敵には拂はれつれ船にて一貫攻めて見よと小舟百餘艘に取り乘りて昨日小笠原が攻めたりし濱際よりぞ上りける寄るを均しく切岸の下なる鹿垣一重引き破りて嘸て出塀の下へ着かんとしける處へ又城より遶まれたる兵貳百餘人拔連れて打ち出でたりける寄手五百餘人眞逆に卷き落され我先にと船にぞ乘り込みける（中略）其後よりは寄手大勢なりといへども敵手痛く防ぎければ攻め屈してたゞかへり逆木引き向樽を搔さて徒に矢軍ばかりにてぞ日を暮らしける

時に延元二年正月十一日瓜生判官保里見伊賀守時成已下兵五千餘人を率ひ杣山城より急を救はんとす此報を探知せる高越後守師泰大軍を率ひて當郡越坂の阪上に堅陣を構へ迎へ戰ふ保時成義鑑等大ひに奮戰し賊軍を阪より追ひ降す事數回されども衆寡敵せず惜むらくは應

瓜生小野寺が勢又追ひ立られて宇都宮と一にならんと傍なる峯へ引き上りけるを里見伊賀守僅の勢にて逢し返せとて横合に進まれたり敵是を大將よと見てしければ自餘の葉武者にはかからずをつ取籠めて討たんとしけるを瓜生と義鑑坊と屹と見て我等爰にて討死せでは御方の勢は助るまじき處ぞと自嘆じて只二人打ちかかり敵の中へ破りて入らんとするを見るに判官が弟林次郎入道源琳同舍弟兵庫助重彈正左衛門照治三人是を見て遥に落ち延びたりけるが共に討死せんと取りて返しけるを義鑑坊尻目に睨みて日來再三謂ひし事をば何時の程に忘れけるぞ我等二人討死したらんは一旦の負兄弟殘なく死したらば永代の負にてあらんずるを思ひ籠る心のなかりける事のいひがひなさよと荒らかに申し留めける間三人の者共げにもと思ひ返して少し猶豫しける間大勢の敵に中を押し隔てられ里見瓜生義鑑坊三人は一所にて討たれにけり葉原より深雪を分けて重鎧に肩をひける者ども數刻の合戰に入り替る勢もなく戰ひ

疲れければ返さんとするに力盡き引かんとするに足たゝみぬされば此處彼處に引き延びて腹を切る者數を知らず適落ち延びる兵も弓矢物具を棄てぬはなし其後外援全く絶へ加之城中糧食竭きて軍馬をも食ひ盡し夜間密かに磯菜海藻を取り之を食して身命を保つに至れり茲に於て再度杣山城の殘兵をして應援せしめ糧食を得んと欲し新田善貞同義助已下七名夜に乘じ密かに城を出て杣山城に赴き應援の計を成す

大日本史曰延元元年帝自二延暦寺一還二京師一使二恒良赴二越前一經二略北國一新田義貞總二軍事一據二金崎城一兵食不レ繼敵勢日熾衆勸下義貞赴二杣山一收レ兵爲中後援上

大平記に曰金崎の城には瓜生が後詰をこそ命に懸けて待れしに判官うち負けて軍勢若干討れぬと聞えければ憑む方なくなりはて心細くぞ覺える日々に隨ひて兵粮乏しくなりければ或は江魚を釣りて飢を資け或は磯菜を取りて日を過す暫しが程こそかやうのものに命を繋ぎて軍をもしけれ餘に事迫りければ寮の御馬を始として諸大將の立たれたる秘藏の名馬共を毎日二匹づつ差し殺して各是をぞ朝夕の食には與へたりける是につけても後詰する者なくては此城今十日をも堪へがたし總大將御兄弟縲に城を御出て候ひて杣山へ入らせ給ひ與力の軍勢を催されて寄手を追ひ拂はれ候へかしと面々に勸め申されければもとより新田左中將義貞脇屋右衛門佐義助洞院左衛門督實世河嶋左近藏人惟賴を案内者にて上下七人三月五日の夜半ばかりに城を忍び秡け出でて杣山へぞ落着せ給ひける瓜生字都宮斜ならず悦びて今一度金崎へ向ひて先度の耻を雪ぎ城中の思を蘇生せしめんと様々思案を廻しけれども東風漸く閑になりて山路の雪も群消へければ國々の勢も寄手に加りて兵十萬騎に餘れり義貞の勢は僅に五百餘人心ばかりは猛けれども馬物具もはかはかしからねば兎やせまし角やせましと身を揉みて廿日餘を過しけるほどに金崎には早馬どもを皆食ひ盡して食事を斷つ事十日ばかりになりにければ軍勢共も今は手足もはたらかずなりにけり

此時に當り賊間諜を放ちて城中飢渴の狀を探知し此城拔くべき時機到來せりと大舉して延元二年三月二日より六日に至る迄晝夜大手の城戸に押掛け攻擊甚急なり

諏方部文書に曰

上略三月二日又於二大手城戸口一抽二軍忠一之條中澤神四郎多胡四郎等令二見知一畢

同三日夜責合戦於二大手一致二軍忠一之條山口三郎見知畢

同五日夜攻大手矢倉下終夜致二合戦軍忠一之條片山孫三郎中澤神四郎等令二存知一者也然間三攻二入城内一自身被レ疵左足被レ射畢仍爲二山口三郎佐々布七郎入道奉行一被レ遂二實撿一畢然早爲レ下二賜御證判一恐々言上如レ件

建武四年三月日高越後守師泰判　承了

市川文書に曰

市川左衛門十郎經助軍忠事

上略自二三月二日一至二五日一夜縮合戦致レ忠六日寅卯時者自二大手一攻二入城内一拾二一命一燒拂對治上者給二一見御判一爲備二後証一言上如レ件

建武四年三月日　承了　花押

市川左衛門十郎經助軍忠事

上略同三月二日者夜縮合戦六日者自二大手一攻二入城内一拾二一命一致二極合戦一上者給二一見御判一爲備二後証一言上如レ件

建武四年三月日　承了　花押

目安

本田治郎左衛門尉久兼申越前國敦賀城合戦軍忠事

上略三月二日合戦攻二寄堀際一致二軍忠一之次第御見知畢

同四日夜切二寄大手城戸口矢倉下一終夜合戦之條豐後彌三郎牛尿郡司等見知之事

同五日夜最前攻二入城一之刻以レ石被レ打レ肩之條高越後守御手之仁泉彌三郎和田九郎等見知畢

上略同三月六日晝夜抽二軍忠一之條証人等分明之上御見知畢然且給二御一見一且爲レ預二御注進一恐々

言上如レ件

建武四年四月日　　承了　花押

城兵死力を尽して防ぎ戦へ共衆寡敵せず且援軍未だ來らざる内飢渇に迫る兵多く心計りは剛なれ共勢力次第に衰へ戰死する者多く爲に三月六日の卯の刻に至り城終ひに陷り畏こかれ共尊良親王は自刄し給ひ皇太子恒良親王は氣比齊晴供奉して城の搦手より〔月見崎〕海岸に降り岸邊にありし捨小舟に東宮を乘せ參らせ櫓櫂なければ舟綱を己が横手綱に結付け海上三十餘町泳ぎ渡りて東宮を密かに柚山に送り參らせよと浦人に託し置き其身は再度海上を泳ぎ歸り父氏治が割腹せる傍にて自ら首掻切同じく殉死す東宮は翌日賊の搜索兵に捕はれ京都に送られ給ひ新田義顯氣比氏治藤原行房里見時義已下の諸將は殉死し其他の城兵八百餘人は皆奮鬪悪戰して國難に倒れし慘烈悲憤歴史著名の古戰場なる事は皆人の知る所にて今猶當時の城戸櫓外堀本丸等の舊跡を存し且本丸には當時殉難將士の遺骸を葬し地有て降雨の際は鬼哭啾々の聲を聞く誰か當時を追懐し襟を正して禮拜せざる者あらんや

（二六）

南山巡狩錄に曰三月小六日金ケ崎の城には柚山の便宜をさつといへども後詰の音信もなしかくてはいかがあるらんと思ひ煩ふ所に大手搦手の寄手十萬餘騎同時に合圖をなし切岸の際まで攻着ければ城兵これを防がんとすれども二十餘日ばかり兵粮尽たりしも馬を殺して是を食し飢渇を忍びそれさへ十餘日ばかりはたちたりしかば防べき力なくただ徒に櫓に上り或は塀の陰にたちやすらひ息をつき居たる斗なり此体なりしかば敵はたやすく城内まで攻入たり　下畧

太平記に云三月六日の卯の刻に大手搦手十萬餘騎同時に切岸の下塀際にぞつきたりける　中畧　河野備後守は搦手より攻め入る敵を支へて半時ばかり戦ひけるが今ははや精力尽きて深手餘多負ひければ攻口を一足も引き退かず三十一人腹切りて同枕にぞ伏したりける新田越後守義顯は一宮の御前に參りて合戰の樣今は是までと覺え候我等力なく弓箭の名を惜む家にて候ふ間自害仕らんずるにて候上樣の御事は縱令敵の中へ御出候ふとも失ひ進らするまでの事はよも候はじ只かやうにて御座めるべしこそ存じ候へと申されければ一宮いつようも御快げに打笑ませ給ひて主上帝都へ還幸成うし時我以爲二元首將一以レ汝令レ爲二股肱臣一夫無二股肱一元首持つこと得んやされば吾命を白刄の上に縮めて怨を黄泉の下に酬いんと思ふなり抑自害をば如何樣にしたるがよきものぞと仰られければ義顯感涙を抑へてかやうに仕るものにて候ふと申しもはてず刀を抜きて逆手に取り直し左の脇に突き立て右の脇のあばら骨二三枚懸けて掻き破り其刀を抜きて宮の御前に差し置きてうつぶしになりてぞ死しにける一宮嬾て其刀を召され御覽するに柄口に血餘うすべりければ御衣の袖にて刀の柄をきりきりと押し巻せ給ひて雪の如くなる御膚を顯し御心の邊に突き立て義顯が枕の上に伏させ給ふ頭大夫行房里見大炊助時義武田與一氣比彌三郎大夫氏治太田帥法眼以下御前に候ひけるがいささらば宮の御供仕らんとて同音に念佛唱へて一度に皆腹を切る是を見て庭上に並居たる兵三百餘人互に差違へ差違へ彌が上に重り伏す氣比大宮司太郎は元來力人に勝れて水練の達者なりければ春宮を小舟に乘せ進らせて櫓かいもなけれども綱手を已が横手綱に結ひつけ海上三十餘町を游ぎて蕪木の浦へぞ着け進らせける是を知る人更になかりければ潛に柚山へ入れ進らせんことは最安かりぬべかりしに一宮を始め進らせて城中の人々殘らず自害する處に我一人逃げて命を活たらば諸人の物笑なるべしと思ひける間春宮を怪しげなる浦人の家に預け置き進らせ是は日本國の主に成らせ給ふべき人にて渡らせ給ふぞ如何にもして柚山の城へ入れ進らせくれよと申含めて蕪木の浦より取りて返し本の海上を游ぎ歸りて彌三郎大夫が自害して伏したる其上に自ら我首を掻き落して片手に提げ大府脫になりて死しにけり　下畧

南山巡狩錄に曰七日夜明ければ春宮御座ありしよし蕪木の浦人告たりしかば島津駿河守忠治〔異本に今

川駿河守にも作る）御迎としてかの所に參り春宮を武家の陣中にともなひ奉り其のち足利高經等きのふ討死せし首どもを實檢しけるに新田殿の御一族にをいては越後守義顯朝臣と里見大炊助時義（異本に義氏ともしるせり）の首ばかりにて自餘の人々の首は見えざりければ尾張守この事を春宮に尋まいらせけるに春宮幼稚の御心にも彼人々杣山にありといはば又彼所に押し寄る事もこそと思召て義貞兄弟は昨日の莊程に自害したりしを役所の内にて火葬になしたりしと聞召けるむね仰られし程に扱は死骸なきも理なりけりとおもひとり暫く杣山を攻ざりけりさればこそ義貞朝臣兄弟は恙なくわたらせ給ひける

下畧

抑金崎城趾の地たるや三方海に接したるが故老松の翠色は渺々たる海水と其色を競ひ對岸の西北には常宮色ケ濱榮螺ケ嶽等の名所を望み西南には野坂愛發の二山雲外に聳へ敦賀港の市街は眼下に集り東南に天筒山の古城趾を眺め北は果なき日本海を見渡し灣内の漁船は恰も散り浮ぶ木の葉に似て風光明媚矚目開豁なる天然の勝地にて氏治朝臣の月を賞し給ひし月見殿の舊跡には巨巖奇石頗る多く恰も仙境に等しく其巖頭に立ち海上を俯瞰すれば當時亘忠景の勅書を髻に結び海上を泳ぎ渡うし俤も偲れ氣比齊晴の東宮を小舟に乘せ參らせ蕉木浦に泳渡せし狀も想ひ出され又樹間を逍遙すれば松籟は閑聲の如く人を驚かし蟲聲は怨むが如く人をして切齒扼腕せしむるなど總て懷古の情に耐へざらしむわはれ血あり情ある人は歴史上最も著名なる此古戰場を訪ひ内地稀に見る所の勝地を探り金崎城趾の碑を一讀し當時皇室に尽されし殉難將士の忠勇義烈に感じ義勇公に奉ずるの精心を養成せば其益する所少なからざるべし

敦賀　大中臣元美（石塚氏）

翠華晉一辭春岩　漂泊滄波托厥躬
前路頻年受勅敵　後軍決戰奇功待
白魚躍入龍舟雪　焦穀吹颺虎壑風
王子降臨蹤耐吊　山楓猶似錦袍紅



敦賀釋了　恭（眞願寺住職）

吊古登高易愴情　兵戈憶昔苦蒼生
衣冠北走烟塵暗　戎馬南來魑魅驚
山樹雲飄旗仗色　澗泉風叫管絃聲
斜陽猶含三軍怨　海嶽天低殺氣横

越前　町原圮橋

欲回皇運計難成　辭去京畿向北行
天外途窮空奉王　城中食渴尚屯兵
一門血碧塗肝腦　千古汗青留姓名
勝敗尋常休絮説　勤王大節自崢嶸

京都　阿形易齋

敵愾義兵難奏功　孤城無援百籌空
南風不競終天恨　埋在故墟殘雪中

京都　荒木正齋

求援杣山人未歸　孤軍難脱幾重圍
傷心將種終焉及　流血染佗皇子衣

敦賀　石塚資元

大君の醜の御楯と遠津祖のこゝに城つきてたゝかひしはや
矢さけひの昔覺て今猶さけは身にしむ峯の松風

肥後　吉水秀直

世に高く聞えけるかな金か崎竹の園生の雪の下をれ

羽前　寶井直砂

金か崎すさし昔を忍れはいそうつなみに千鳥なくなり

肥前　籠手田安定

糧は盡弓はをれてもますらをのたけきこゝろはたゆまさりけり
大君を思ふこゝろは金か崎巖となりて世に殘りけり

敦賀　石塚資雄

忍れは袖こそぬるれ金か崎あた浪あらくよせし昔を

敦賀　大和田虎子雄

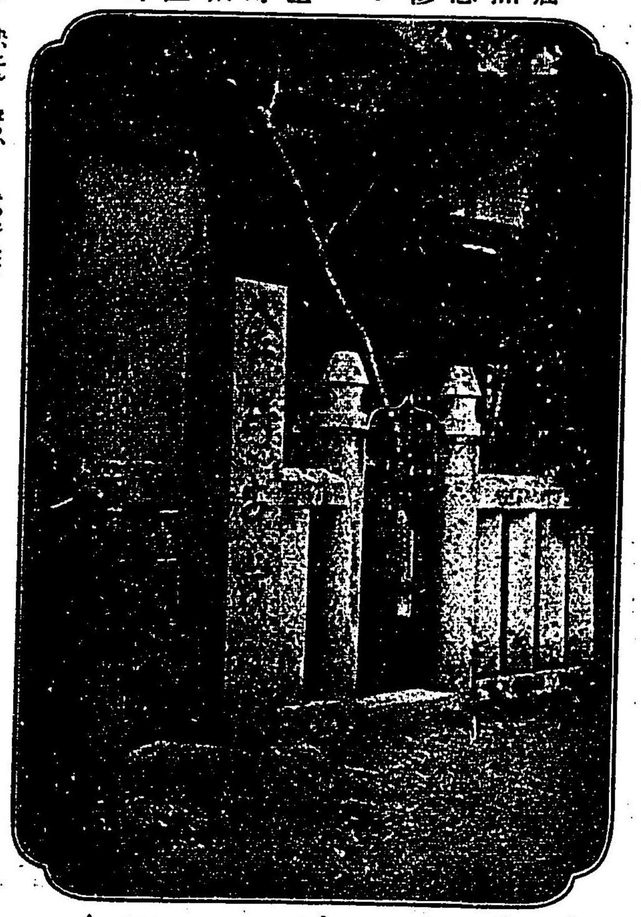
御手に太刀ふれしもこゝかはなの影

## ○金崎城趾碑

金崎城趾の碑は明治十一年敦賀の人片山政治郎已下の有志者數名の尽力により建設せしものにて其原因は

延元の戦役後五百有餘年の星霜を經れ共未だ其城跡へ一碑を建設し殉難將士の忠魂を奉慰する者なく歴史上著名の城趾は徒に叢林繁茂し狐狸の巣窟となりて湮滅せんことを慨嘆し其旨趣を當時の管轄廳滋賀縣令（明治十一年の頃は敦賀郡は滋賀縣の管轄にてありしなり）籠手田安定に具申し同氏に選文を請ひ而して書を元敦賀縣參事熊谷武五郎直光に依賴し石工に命じて彫刻せしめ之れを金崎の山麓に創建し周圍に石造の瑞垣を築造し江湖の志士に紹介して嚴肅なる慰靈大祭を擧行し尊良恒良両親王を始め殉難將士の靈魂を奉慰し其事蹟を永く後世に傳へし効勢や多大なり該碑石を創立せしは金崎宮の創建より十有六年前の事にして其碑文は則左の如し

壯烈悲慘ナル金崎城趾碑



A stone monument in commemoration of the bloody battle of Kanagasaki Castle.



金崎城趾碑

左近衛中將新田義貞當二元弘之初一蒞三北條高時於二鎌倉一自二足利尊氏叛一擧レ族勤レ王宗黨死義者八千餘人矣嗚呼何其烈也然而皇運不レ回王師屢敗賊勢滋熾義貞乃奉二皇太子恒良及親王尊良一赴二北國一圖二恢復一至二敦津一聞二賊兵塞レ路轉由二木芽嶺一會二大雪一士卒凍飢燎二弓箭一相抱取レ暖間關三日纔達二敦賀一氣比氏治等迎入二金崎城一義貞遣二弟義助一據二杣山一以相應援時賊兵數萬圍二金崎一城兵拒戰累月既而城中食竭義貞知二其竟不レ可レ爲潛出レ城入二杣山一蓋其志在二更出兵擣レ賊也而遷延旬餘金崎遂陥尊良親王自刃新田義顯里見時義藤原行房氣比氏治等殉レ難城兵八百皆死レ之宜者僅十二人皇太子匿レ於二燕木浦一尋被レ執實延元二年春三月也居半歲義貞攻二黑丸城一遂戰死於二藤嶋一矣余每レ讀レ史至二義貞殉一叡山行宮一事一未嘗不レ掩レ卷而歎曰爲二人臣一者在二順境一盡レ忠於二其君一未以爲甚難一其處二逆境一大節凜然不レ可レ奪如二義貞一者世果有二幾人一而至二敦賀事一實有二不レ忍言者一焉夫恒良以二皇太子之尊一而厄二身於一猾賊之手一尊良以二親王之貴一而殞二命於一兇烟之中一太子之尊親王之貴尚不レ能レ保二其身一悲夫明治九年十一月予按レ部抵二金崎一吊二其古趾一仰望二峻嶽一俯瞰二怒濤一想下見當年苦戰之狀與亘忠景結二詔書於一髻泗レ海而來上氣比齊●照送三皇太子於二燕木浦一飯而殉二親王一事不レ覺感慨涙下因咏二和歌三首一以慰二英魂一其一曰加天波都幾由美盤遠連互母麻須良乃多計伎古呂波太遊末斜里希理其二曰於本幾美乎於毛布故路波可禰賀散貴以盤保登々母爾與耳能許利計里其三曰迦伎離安留伊迺知波須氏氏迦

伎離奈伎那乎與爾慶古寸比徒晉由可志貴頃土人謀建レ石誌二其事跋一來徵二文乎予一因記レ之以與焉　明治十一年八月十二日

滋賀縣令正六位籠手田安定撰

從五位熊谷武五郎篆額并書

金崎なる城趾の碑をみてよみ侍る

敦賀　愛宕由緒

武夫のひくや手馴の梓弓おとにひゝきて殘る碑文

## ○金崎城用水の古跡

金崎城中の飲用水は二ヶ所ありて一は現在金崎宮内玉垣外北方櫻樹の側に瑞垣を回せし神饌用水井と（毎朝同宮の神饌に用ひ他の飲用を禁せり）一は三の城戸北方の溪谷に涌出せる清泉是なり古來其所の字を水の手と稱せり已上の二泉は如何なる大旱の年にも清水涸る事なし



## ○月見殿舊跡

金崎宮域内北西の方の海上に斗出せる尾崎を絹掛崎と稱せり同地平坦の松林一帶の地は金崎城中本丸の舊跡にて同所北端の高地には巨巖奇石又櫻樹多く山紫水明仙境に等しき秀麗の地なり該地は金崎城中月見殿のありし所にて（今猶當時の土部石垣の跡存せり）城主氏治朝臣常に月を愛で給ひし舊跡なるが故古來同所を月見崎と稱せり同所はさすがに本丸の舊跡なれば金崎城中第一の高地にて風景も又第一位を占眺望絶佳風光明媚内地稀に見る景勝の地なれば常に内外の觀光者絶る事なく夜るも又風波穩かに月明らかなる晴霄には床几に憩ひ又奇岩に倚り仰ひて天空を望めば銀河は白く南北に流れ伏して海上を瞰すれば玉兎波を走り金波は絶ず磯邊に寄せて白玉と變ず其風景譬ふるものなく且月に對して當時を追懷し無限の感轉禁じ難く月にうかれて深更に至るを忘るゝ雅客多く觀月には最も勝れし所にて月見崎の名空しからず

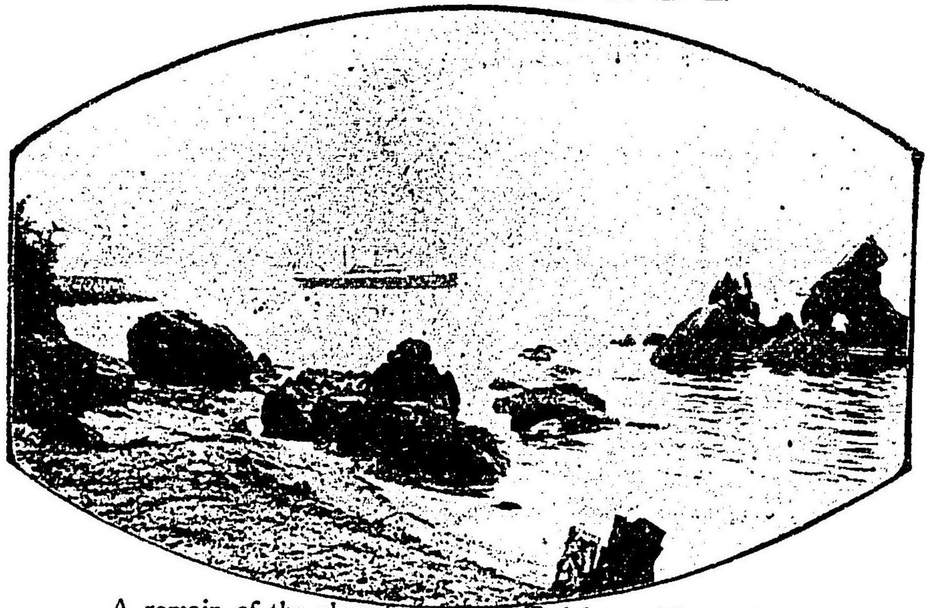
Remains of "Tsukimi-goten," the centre of Kanagasaki Castle.

## ○亘新左衞門忠景泳渡の古跡

延元二年正月二日亘新左衞門忠景後醍醐天皇より新田義貞へ下し給へる勅書を髻に結び櫛川の出崎より海を泳渡り金崎城に入り勅書を新田義貞に傳へし際泳ぎ初しは櫛川の出崎（花城山の麓の海岸にて鷗ヶ崎と相對せし出崎なるべし松原以東の陸地には敵軍充滿せるが故同所より海上を泳ぎ渡りしなり）にて上陸せし地は同所と相對せる金崎城の搦手夫婦岩の海岸なら（即ち崎鷗の海岸）ん同海岸に亘忠景腰掛岩と云傳る岩あればなり

太平記に曰く去る程に先帝は吉野に御座ありて近國の兵馳せ參る由聞ゑければ京都の周章は申すに及ばず諸國の武士も又天下穩ならずと安き心も無りけり此事已に一両月に及びけれども金崎の城には出入絶えたるに依りて知る人もなかりける處に正月二日朝暁に櫛川の島崎より金崎を差して游ぐ者あり海松和布を被く海士人か浪に漂ふ水鳥かと目をつけて是

## 亘忠景泳渡入城ノ古跡



A remain of the place from where Tadakage Wataru is said to have entered to the castle besieged by the enemy swimming across the gulf(1337)



を見ればそれにはあらずして亘新左衛門といひける者吉野の帝よりなされたる綸旨を髻に結ひつけて游ぐにてぞありける城中の人々驚きて急ぎ聞きて見るに先帝潛に吉野へ臨幸成りて近國の士悉く馳せ參る間不日に京都を攻めらるべきよし載せられたり寄手は是を聞きて此際隱しつることを城中に早知りぬと安からず思へば城の内には助の兵共國々に出で來て今に寄手を追掃はめと悦の心身に餘れり　下畧

金崎城趾より海上を伏瞰し亘忠景朝臣の古事を思ひ出て

髻に勅書むすびて泳きけん
おもかけうかふ氣比の海つら

大中臣朝臣資雄

## ○金崎城木戸櫓の舊跡

金崎城一の城戸櫓等の舊跡を古史に據考るに現今の金崎隧道上部なる西北方の山上にやあらんと覺しく而て同所の溪谷は一の城戸外なる天然の防禦地にやあらん（山城は多く溪谷を堀に代用し天然の防禦要害もせり）

大平記に云　上畧　彼城の有樣三方は海に依て岸高く巖滑なり巽の方に當れる山一つ城より少し高くして寄手城中を目の下に見下すと雖も岸絶地低にして巽の方もいへれば天筒山なるべし同山上より金崎は眼下に見下す邪ん得べし）近付寄ぬれば城郭一片の雲の上に峙ち遠して射れば其矢萬仞の谷の底に落（一の城戸外なる現今の隧道となれる溪谷より城郭を見上し狀ならん）されば如何なる巧を出して攻る共切岸の邊迄も近付べき樣はなかりける上畧

又二の城戸の舊跡は現在の愛宕神社後方の（愛宕神社及金前寺共に現今の所に移轉せしは文祿年間にて延元の戰役より貳百六十年餘後の事なり）山上にやと覺く同山上の現狀は當時城戸櫓などありし形狀をなし又同溪谷は二の城戸外なる天然の防禦地ならんか

大平記云　上畧　小笠原信濃守貞宗の兵八百人を勝りて東の山の麓より巽角の尾を直逆にかづき連てぞ揚たりける

金崎城本丸の舊跡より一二の城戸の方は巽に相當れり又小笠原勢の寄せし所は海岸より七曲の尾崎か或は現在の金前寺後方の尾を直逆に（當時は泉村一帶の地は海中にてありし事古書に見ゆ蓋山の麓には少の砂地）山上なる一二の城戸の中途をさして攻寄しにやあらん

太平記云城には此や破らるべき所なりけん城中の兵三百餘人二の城戸を開て同時に打て出たり　中畧　栗生左衛門火威の鎧に龍頭の甲を夕日に輝し五尺三寸の太刀に樫の棒の八角に削たるが長さ一丈二三尺もあるらんと覺たるを打振て大勢の中へ走りかゝり片手打に一二三十重打にぞ打たりける寄手の兵四五十人犬居にぞうと打据られ中天にづんと打擧られ沙の上に倒れ伏す後陣の勢是を見てしどろになりて浪打際に群立所へ　下畧（東の山の麓より巽の角の尾を直逆にといひ又沙の上に倒伏といひ又浪打際に群立といへるにても巽の方に當る七曲の尾又今の金前寺附近の山麓は當時海なりし事明かならんか）

又金崎落城の際新田家の部將由良新左衛門具滋長濱

彈正顯寛安右六郎左衛門利勝已下弐拾餘人が義顯已下の割腹を終る迄敵一人も城内へ攻入さしものをと烈敵防戰なせしは一の城戸なり

大平記に云三重拵たる二の木戸までゞ攻入ける由良長濱二人新田越後守の前に參して申けるは城中の兵ども數日のつかれに依て今は矢一をもはかはかしく仕得候はぬ間敵既に一二の木戸を破りて攻近付て候なり今は如何に思召とも叶べからず春宮をば小舟にめさせ進らせ何くの浦へも落し進らせ候べし自餘の人々は一所に集りて御自害あるべしとこそ存じ候へ其程は我等攻口へ罷向て相支候べし見苦からんもの等をば皆海へ入させられ候へと申て御前を立けるが餘に疲て足も快く立ざりければ二の木戸の脇に射殺され伏たる死人の股の肉を切て二十餘人の者等一口づゝ喰て是を力にしてゞ戰ひける下畧

又三の城戸櫓の舊跡は水の手と云る谷と現今の金崎宮神饌用水井のある谷とを天然の防禦地となし城戸は其所より本丸に至阪上にありしにやあらんと思は此渓谷の西北は一帶平面地にて然も城跡中第一の高地にして古より同所を本丸の舊跡と云傳ふればなり



## ○絹掛松の由緒

絹掛の松の所在は金崎城の搦手より海上へ斗出せる磯崎に翠色滴るが如き孤松肖然と巖上に樹ち海風と共に昔を語るが如く又は怨が如く訴ふるが如き聲を發しつゝ存在せる孤松は則ち絹掛の松にゞ有ける抑此松を絹掛の松と稱するは金崎落城の際氣比齊晴朝臣が東宮恒良親王を杣山城に送り參らせんと東宮を背負ひて城の搦手より海岸に降りし時東宮の着給へる御上衣は人目に觸るゝ虞れあれば脱せ參らせて巖上の松が枝に掛け置き其所より捨小舟に乘せ申て其舟を曳き海上三十餘丁泳ぎ渡りし時に東宮の御衣を掛け給へる松なる故後の人其松を稱して東宮の絹掛の松と云ひ又其松の生たる磯崎をも絹掛崎と稱せしなりとゞ此絹掛崎は巨巖より成れる風光明媚の地にて殊に前記の如き由緒ある磯崎なればいつ迄も保存なしたき者なり然るに此



金崎城搦手ナル絹掛松

An old pine tree so called Kinukake found by the back gate of Kanagasaki Castle.

附近より盛んに石灰石を切出し同所を始め月見崎をも日々切崩し居れば茲數年の後は歴史著名の城趾も有名の松も共に跡形もなくなるは甚心なき業にてかゝる著名の地は如何にもして歴史の記念に永存したきものにゞ有ける

親王の御手ふれにし跡も苔むして
幾代へにけん絹掛の松

敦賀　石塚資雄

## ○金崎の巖窟

金崎城本丸の北方へ斗出せる月見崎の巖壁の下部に在りて深さ約三十間入口は比較的狹隘なれ共窟内に入れば高さ七八尺乃至壹丈計りあり天井は無數の鍾乳石にて其先より絶ず雫滴り窟内は闇黑なるが故燈火を携へざれば入り難く窟内の右方に清水湧出する箇ケ所あり此巖窟は金崎落城の時新田義貞朝臣の部下船田經正栗生顯友土岐頼勝矢嶋安崇の四人茲に隱れて三日三夜を過し賊軍退去の後ち義貞朝臣の居ます杣山城へ

金崎城搦手ノ潜窟

A cavern found by the back gate of Kanagasaki Castle where are said to have lay hidden some warriors after the castle had been taken (1337).



赴ひけり故に俗に新田のぬけ穴と稱す

太平記に曰く土岐安波守栗生佐衛門矢嶋七郎三人は一所にて腹切らんとて岩の上に立並びて居たりける處に船田長門守來りて抑新田殿の御一家の運爰にて悉く極め給はゝ誰々も殘らず討死すべけれども總大將兄弟杣山に御座あり公達も三四人まで此處彼處に御座ある上は我等一人も活き殘りて御用に立たんずるこそ永代の忠功にて侍らめ何といふ沙汰もなく自害しつれて敵に所得せさせての用は何事ぞやいざさせ給へ若しやと隱れて見んと申しければ三人の者ども船田が跡に附きて遙の磯べ遠淺の浪を分けて半町ばかり行きたれば磯打つ波に當りて大に穿けたる岩穴あり爰こそ究竟の隱所なれとて四人共に此穴の中に隱れて三日三夜を過しける心の中こそ悲しけれ

下畧

大中臣朝臣資雄

武夫の其名はくちすとことはに
いまものこれる磯の岩室

## ○金崎城趾燒米の化石

金崎城舊跡二の城戸と三の城戸との中間に平坦の地あり其所道路の左右林中の土を一二寸を掘さ除け探求せば土に混じたる小粒の黑石を得べし是則ち燒米の化石なり此化石の出づる平面地は金崎城中糧米倉庫のありし舊跡にて元龜元年四月朝倉景恒織田信長に降伏せし時同城を破却し米倉をも燒拂ひし遺物にて今猶多く土中に存す此化石の事を日本石品錄には燒米砂（金崎城蹟）と記載せり

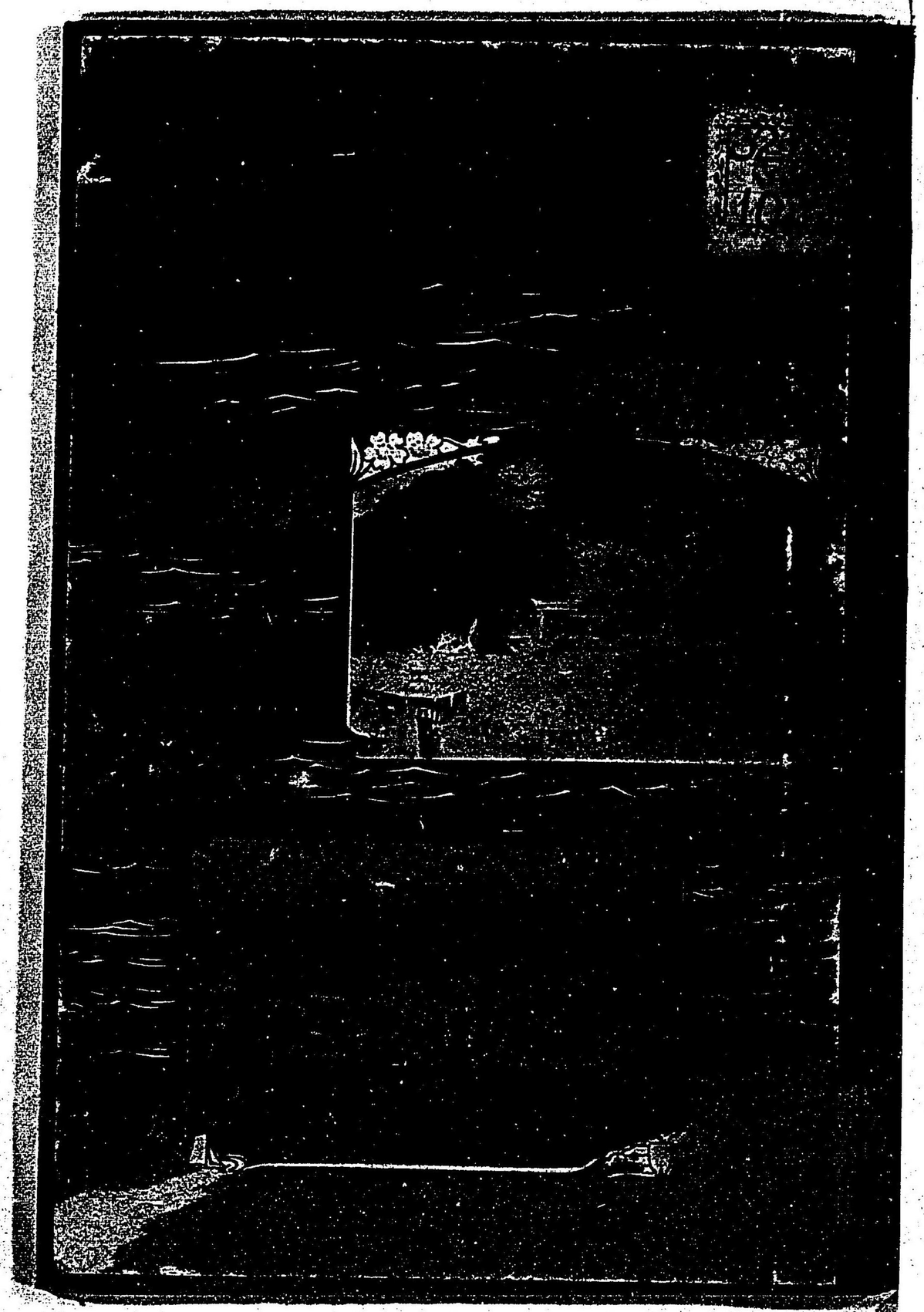
明治四十二年九月一日印刷
同　年同月五日發行

福井縣越前國敦賀町曙八拾九番地士族
著作兼發行者　石塚資雄

福井縣越前國敦賀鎭座
發行所　金崎宮社務所

京都市蛸藥師烏丸東入一蓮社町參百壹番地
印刷者　伊藤豐之助

京都市蛸藥師烏丸東入一蓮社町參百壹番地
印刷所　伊藤聚英館



013916−000−6

327−102

金崎宮参拝案内記

石塚　資雄／編

M42

ABB−0156